様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３２８１

研究課題名（和文）農民の生活実践からみる団地移転プロジェクト後の中国農村の社会変容と再構築

研究課題名（英文）Relocation and Transformation by New Village Construction on Policy in China: Focus on the Farmers Life Practice

研究代表者
閻　美芳（YAN, MEIFANG）

宇都宮大学・雑草と里山の科学教育研究センター・講師

研究者番号：４０７５４２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究のポイントは、日本の人々にとっては比較的情報が乏しい中国の農村について内在的に理解できるようにする点である。研究計画にしたがって、中国天津市・山東省・河南省の各農村で調査を行い、農民を団地に移転させる政府主導のプロジェクトがもたらす不条理と、それに抵抗する農民たちの正当性の論理について考察してきた。これらの研究成果の一部は、南裕子・閻美芳編著『中国の「村」を問い直す―流動化する農村社会に生きる人びとの論理』の第一章、および『村落社会研究ジャーナル』に掲載決定した論文「一人っ子政策は中国の村に何を残したのか―山東省の農村において生育制度が果たした役割に着目して―」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国の人口のおよそ半分を占める農民の生活実態についての研究は、そもそも数が少ないだけでなく、政府資料等に頼った統計的研究に留まる場合も多い。本研究はそうした研究の欠を補うために、村落コミュニティに長く滞在し、とくに団地移転プロジェクトに伴う農村の急速な都市化がもたらした生活スタイルの改変に、農民たちがどのような論理で立ち向かい、生活戦略を立てているのかについて、彼ら／彼女らの価値観にまで踏み込みつつ、分析的に明らかにした。このことにより、諸制度に還元できない中国固有の国家観や人間観が、中国農民の行為に深く影響していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The point of this study is internal understanding of rural communities in China. This study is based on 3 years-investigation, having clarified the way of thinking of people living in the above. In Tianjin, by rural urbanization project, the farmers were moved to housing complex in accordance with local government. However, people living in the new place had a hard time fitting in and some of them cultivated the lawn ground in order to grow vegetables. People said they were right because cultivating was an insurance of farmers that governments basically had to engage in. For more information, following articles are written in "Reconsidering the understandings about Chinese village: logics of people living in changing rural society", and "What does China's One-Child Policy Leave to Rural Communities?: A Case Study of Rural Communities in Shandong Province Focusing on the Influence of the Reproduction System" (The decision of publication has been reported by Journal of Rural Studies).

研究分野：地域研究

キーワード：中国　農村　生活環境　生活戦略　生活空間　正当性論理　一人っ子政策　体情

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様 式 Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国では、2006 年に新農村建設政策が実施されてから、各地で農民を一か所の都市型集合住宅に移転させる「団地移転プロジェクト」が行われるようになった。ところがこのプロジェクトは、各地で農民たちから激しい抵抗を受け、大きな社会問題となっていた。

２．研究の目的

農民の生活改善のために実施されている団地移転プロジェクトが、なぜ中国各地で当の農民たちから死をも辞さないほどの抵抗を受けているのだろうか。この点について従来の研究では、主として制度的な側面から一定程度説明がなされてきたが、団地への移転という空間変容が当該農民にとってそれが内在的にどのような問題であり、またそれがどのような社会構造と結び付いているのかについては、解明されてこなかった。そこで本研究では、中国の「団地移転プロジェクト」を実施している村を事例として、団地移転が農民自身や村落コミュニティにどのような変容をもたらしているのかについて、フィールド調査を通じて明らかにすることを通じて、農民自身の視点に立った生活戦略の論理の析出を目的としている。

３．研究の方法

申請者は今回の調査に先立って、2008 年から 2009 年にかけて、天津市武清区の農村で調査を実施してきた。今回の調査では、2017 年から 2019 年にかけて、それまでに築いてきた人脈を活かしつつ、団地に移転した農民に対してインタビュー調査を実施し、当該農民たちがどのように団地移転後の都市的生活様式を「飼いならして」いるのかを明らかにしようとしてきた。また、天津市武清区の政府関係者にもインタビューを行い、団地移転プロジェクトを主導する政府側の論理の解明にも力を入れた。聞き取り調査では、農民戸籍が変わらないなら団地へは移転したくないという考えが強いなか、それでも農民を団地移転へと駆り立てたのが、一人っ子政策後に生まれた若者であることが明らかになった。そこで、団地移転を推し進める内在的なアクターの存在にも目を向け、調査地を山東省や河南省の農村にも広げるようになった。以上のように、調査方法としては、これまで蓄積してきた調査地での人間関係を利用しつつ、主として聞き取り調査を中心にデータを収集し、そのデータを多角的・立体的に解明することを目指してきた。

４．研究成果

2017 年 6 月に、日中社会学会第 29 回大会（大阪大学）において「団地移転プロジェクト後の村落消滅過程にみる村人の抵抗・忍従の論理――天津市武清区 X 村を事例に」をタイトルとした学会発表を単独で行った。その後、調査の進展を踏まえて、研究成果を論文の形にまとめた。具体的には、南裕子・閻美芳編著『中国の「村」を問い直す――流動化する農村社会に生きる人びとの論理』（明石書店、ISBN978-4-7503-4833-9、2019 年出版）の第一章「‘アウトロー’的行為の正しさを支える中国生民の正当性論理――天津市武清区Ｘ村の団地移転を事例として」

（pp. 32-61）に、本研究成果を掲載した。この論文では、団地内に配分されたユニットを手に入れても団地へ移転しようとせずに村内で暮らし続ける人や、団地に移転はしたものの、団地内の芝生を畑に開墾するといった、一見すると破壊的な行為を行っている村人を取り上げている。中国では、農民戸籍と都市戸籍という形で都市住民と農民とを二分しており、それが「都市と農村の二元化構造」を生み出していると言われている。天津市のこの事例は、農民戸籍のまま、農民を都市型住宅に移転させる実験であったといえる。団地移転後も住民は農民戸籍のままであるため、団地住民は失業保険や医療保険など都市住民をカバーする福祉制度の対象とはなっておらず、生活保障は各住民に任されてしまっている。そのため、団地住民は、芝生を畑に開墾したり、わざわざ村の跡地に出かけていって野菜畑を開墾したりする者が多かったのである。このような一見すると‘アウトロー’的な行為をする村人はしかし、インタビューをしてみると、一様に自分たちのしていることは正しいと主張する。この主張を支える村人たちの正当性の論理を、インタビューデータから探ったのが本稿である。

2019 年 6 月には、日中社会学会第 31 回大会（東京農工大学）において、「一人っ子の都市移住による農家と農村の崩壊過程――中国山東省農村における生育制度の逆機能を焦点として」と題して学会報告を単独で行った。先に示した天津市で実施された農民戸籍のままの団地移転においては、当の農民たちに大きな生活負担をもたらしていたが、それでも村人の 95%は団地に移転していた。村人は団地移転に伴って生活コストの上昇が予想されていた（光熱水費や団地の管理費用等も別途かかるようになる）にもかかわらず、それでも移転を決意した背景には、一人っ子政策後に生まれた若者の存在が大きかった。そこで、日中社会学会 31 回大会では、中国における「生育制度」という家族の再生産を担保してきた文化装置が、どのように若者の都市移転をプッシュしたのかについて、山東省の農村での調査をもとに報告を行った。この時の報告に対するコメントをふまえて、日本村落研究学会編『村落社会研究ジャーナル』に「一人っ子政策は中国の農村に何を残したのか――中国 山東省の農村において生育制度が果たした役割に着目して――」を投稿し、すでに雑誌掲載が決定している。

2019 年 11 月には、調査対象地域を河南省の農村にも広げた。中国の沿海部への出稼ぎ者を多く送り出している地域である河南省の中で、「建設美麗郷村」（美しい郷村を建設せよ）のスローガンのもと、農村に内在する魅力を発掘し、「農村」に力点を置いた農村都市化を推し進めている村に注目した。この「建設美麗郷村」のプロセスにおいては、都市にいったん流出した村の若者が故郷に戻って起業する動きがあることが明らかになっている。

このように農村都市化といっても、団地建設のような形もあれば、日本でいうところの村おこし的な形で実質的に都市との結びつきを強める場合もあるし、従来型の向都離村的な動きも継続的に生じている。しかしこれらには共通した行為規範が存在しており、それらはしばしば制度的な説明では十分に解明できない文化的な要素を多分に含んでいる。

以上のように、本研究では従来の中国研究の欠を補うため、できるだけ中国の村落コミュニティに長く滞在し、都市化が農村コミュニティにもたらした社会的影響と農民の主体的な対応について把握することにつとめた。とくに団地移転プロジェクトに伴う農村の急速な都市化がも

たらした生活スタイルの改変に、農民たちがどのような論理で立ち向かい、生活戦略を立てているのかについて、彼ら／彼女らの価値観にまで踏み込んで考察を行ってきた。

天津武清区の団地移転プロジェクトの場合、団地に移転した農民の多くが、移転後に団地の芝生を開墾するなどの‘破壊的な’行為に加担していた。しかし彼ら／彼女らは、こうした行為は農民として当然の行いであると主張する。農民身分のままで福祉制度も整わない条件下では、野菜畑の耕作はむしろ自立更生を高め、不作為を続ける行政をむしろ助けるための“正しい行為”であると、自己正当化するのである。

こうした正当化論理を繰り出す背景には、農民独自の国家観・人間観、すなわち、理想的な為政者であれば民の生存の苦しみに「体情」できるはずだという観念の共有がある。「体情」（情ヲ体スル）の「体」とは、その人と身を重ね合わせ、その人の身になって行動することを意味する。また、「情」とは、窮地に立たされる弱者に心を寄せ、思いやることを指している。団地移転を拒否する村人の中には、村や鎮政府の幹部の非情を北京に「陳情」すれば、農民身分のまま農地を失うという不条理に追い込まれた自分たちへの「同情」を必ずや引き出すことに成功し、状況を改善してもらえるはずだと期待している者もある。このように、窮地に陥った農民の行動規範の中には、中国特有の国家観・人間観に基づいた価値判断基準の存在していることが本研究から明らかになった。これについては、2020 年 6 月に開催されたアジア政経学会・春季大会（web による書面開催）において、「中国における下からの公の生成プロセス―「差序格局」と「体情」からみた中国社会論―」をタイトルとした学会発表を単独で行った。

中国における政府主導の都市化が農村にどのような影響をもたらすのかについては、理論的にも実践的にも、いまだ十分に明らかにされているとはいない。しかし本研究における農村コミュニティでの長期にわたる調査は、農民自身の視点に立った生活戦略の論理の析出に成功したことによって、諸制度に還元することができない、中国固有の国家観や人間観にもとづく中国農民の思考様式を理解する途を開いたといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 閻美芳	４．巻 -
２．論文標題 「一人っ子政策は中国の村に何を残したのか―山東省の農村において生育制度が果たした役割に着目して―」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『村落社会研究ジャーナル』	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 閻美芳
２．発表標題 中国における下からの公の生成プロセス―「差序格局」と「体情」からみた中国社会論―
３．学会等名 アジア政経学会2020年度春季大会(webでの書面開催)
４．発表年 2020年

１．発表者名 閻美芳
２．発表標題 一人っ子の都市移住による農家と農村の崩壊過程―中国山東省農村における生育制度の逆機能を焦点として
３．学会等名 日中社会学会第31回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 閻美芳
２．発表標題 団地移転プロジェクト後の村落消滅過程にみる村人の抵抗・忍従の論理―天津市武清区X村を事例に
３．学会等名 日中社会学会第29回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 南　裕子、閻　美芳	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 253頁
３．書名 中国の「村」を問い直す―流動化する農村社会に生きる人びとの論理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考